



日夏耿之介全集

河出書房新社

監修

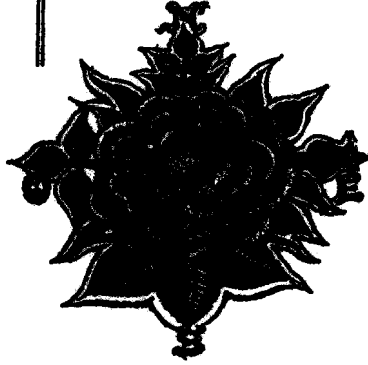
矢野峰人

山内義雄

吉田健一

第八卷

隨筆・創作



日夏耿之介全集 第八卷 ©1978

一九七八年六月一〇日印刷 一九七八年六月三〇日發行

定價……………一三〇〇〇圓

著者……………日夏耿之介

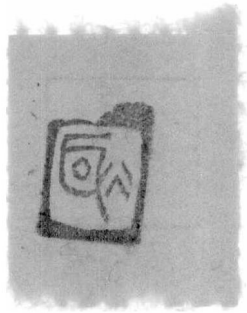
裝畫……………長谷川潔

裝本……………杉浦康平・鈴木一誌

發行者……………佐藤皓三

發行所……………河出書房新社

東京都新宿區住吉町九五 電話〇三三三五五三二(代) 振替東京〇一〇八〇二  
3395-437008-0961



# 第八卷 隨筆創作

目次

## 隨筆

落日を漁る少年……………	5
私の中學時代……………	12
火戲記……………	16
私の受けてきた教育……………	19
亡父を祭る文……………	29
母を偲ぶの記……………	31
飯田之記……………	37
飯田かたぎ……………	40
仲之町隨筆……………	59
ほととぎすを聴くの記……………	62



白山御殿町……………	65
養神亭の浴室……………	74
湯ヶ島記……………	77
岐蘇の旅……………	80
病窓雜誌……………	83
鶴沼之記……………	86
印矩巷談……………	88
水鶏の宿……………	91
馬琴の手紙……………	93
美しき書籍の話……………	96
限定本のおもひ出……………	99
稀本ばなし……………	103
春・季感・女詩人……………	105
秋の抒情詩……………	109

俳話詩語……………114	鷗外先生の墓に詣るの記……………190
紅葉が句の「拵へ」……………123	俊髦亡ぶ……………192
漱石餘裕俳諧……………132	我鬼窟主人の死……………197
荷風俳諧の粹……………140	吉江喬松博士と自分……………204
黄眠草堂隨録……………146	吉江先生の臨終……………211
月世界の男……………153	怒る徳富蘆花……………214
秋香記……………157	當流の艶隠者……………217
文房之記……………159	センスのある人……………221
新拾古玩記……………164	與謝野晶子さんが逝かれた……………223
二蓬……………167	李太郎情調……………229
羅山……………168	詩集「沙金」……………233
蘭菊……………171	『愛の詩集』……………236
學問的寄與……………173	三人の少年詩人……………239
學問戀愛モラルその他……………177	爐邊子の墓に詣るの記……………255



假面に集つた人々……………258	栗里亭記……………317
回想の象徴詩派……………262	お城下日記……………320
長谷川潔……………271	秋霖日記……………322
鐵齋學人……………274	林を出づるの記……………326
菱田春草に就て……………276	凝花村舎記……………328
日録	雪後庵撥筆……………331
病間日記……………283	文永寺……………335
さ月日記……………285	ふづき風流……………338
朱夏日記……………288	市民日記……………340
香母亭日記……………290	讀書日記……………343
山莊記……………295	榴花深處日録……………346
山莊日記……………299	對話
聽雪廬日記……………309	神經文學遊談……………357
聽雪廬日記鈔……………313	詩榻茶談……………361

小品

源氏傳授……………371

古神像……………375

魔界類るるの記……………378

吳竹さう紙……………383

戯曲

美の遍路……………387

小説

竹枝町巷談……………403

短歌

病艸子……………497

文人畫風……………505

俳句・俳文

婆羅門俳諧……………529

我句獨註……………539

俳諧自我註……………546

收録作品一覽……………549

解題……………555

日夏耿之介著作目錄……………557

日夏耿之介年譜……………631

第八卷

隨筆·創作





隨筆



## 落日を漁る少年——私の學生の頃

大學を出たといふよりも追ん出たといふ心持でさへあつた。明日をも知れぬおもひで、一枚の擬局紙刷りの卒業證書をにぎつて、とにかく校門を出た。行手は暗澹として分らない。

—

小學生の頃は——

學校がいやでならなかつた。なぜ、あのやうに下等で、意地わるな横着な子ばかりゐて威張つてゐる小學校などといふ處に通はねばならぬのかといつも心に嘆息してゐた。

それよりか家にゐてねころんで、夏ならば水羊羹、冬ならば花林糖のやうな菓子を喰べながら、愛讀する本に讀み耽つて、その世界にぢりぢり這入り込んで、その善良な住民となりおほせ、その空氣を十分肺に吸つて、彩色した餅を喰べてゆかれるやうなそんな浪漫的な世界に夢中になつて、この汚なくて没義道で淺猿しい現實の人生には冷たくそつぽを向いてくらしゆく程世にもたのしいことはないと考えた。勉強しないから勿論優等

でなかつた。數學が大きらひであるといふことは、我々如き者の凡そ常道であるが、これには少し註解がある。

わたくしが算術がきらひであつたのは、あの眞四角な實證の世界のなかで、このたましひを6にきめたり8にねち曲げたりして、空想のゆとりが少しもないことが神經に苦痛であるからいやであつたので、或る時は3と7とが21になるといふやうな、はつきりと正しい答へが、自分の生に於ける良心に對し（良心に照し）實にうれしかつたことは是又争へなかつた。そんな悦びはあるものの、沸々と沸き起り止め度もないわたくしの無限の空想のエネルギーを、無殘にも中途でちよん切つてへし折つて、あのきちやうめんな數學的實證の四疊半へ無理にも箝め込む押し込むといふことが耐らなくきらひであつた。いやであつた。

それで算術は一向勉強しなかつた。國語の方は、これはあまりたやすいので輕蔑して復習といふことをしなかつた。そのため、しばしば何でもない成語熟語の眞當な答へが出来かねるやうなことがあつて、點はそれ程でなかつた。唱歌はうたつてゐるうちに、空想が限りなくわいて出て、廣い

\*

二階の唱歌室から遠望すると、遠く惠那山脈が見える、中央アルプスの南端が見える。近くには天龍川の支流が、花崗岩の白く光った河原をさらして濼くひろく流れてゐる。何故となく涙が湧いて出てつい現實のわれを忘れてしまふ。だから唱歌は大好きであつた。が、唱歌の點は決してよくはなかつた。體操は好きでもきらひでもなかつたが、スポーツといふことを何もせず、ただ好きな讀書と空想しかしてゐないわたくしにとつて、血液の巡環がよくなつて、あたまがはつきりして、現實が正しく爽やかに映じ來つて——だからその點では好きであつた。が、野球をしれば體操の正課の代りに課せられたが、野球は下手だから、といふよりは左利きで打つてもせず、打てないから笑はれ、笑はれるから侮辱を感じ、ルールなど覺えようともしないから大きらひ、それこそ身振ひがするほど大きらひであつた（それが後年は見て面白く聽いてたのしくなつた）。野球と云つると、體操の時間をエスケープして上手に逃げかへつて、こつそり二階に上つて愛讀書を山と積み上げて讀み耽つた。菓子を食べたくないと、そつと仲働か子守女を呼んで、裏口から家の借家の菓子屋へ行つて菓子を貰つて來させて喰べながら夢中で本を讀んだ。讀書中のわたくしは、忽ちにして王子、忽ちにして英雄であつた。冒険に冒険がつづき、榮華に榮華がつづいた。日がかげつて昏くなると屋根へ出て讀む（まだ電燈が飯田の町にとぼらない頃である）。それから更に二階の高い大屋根の上へ大梯子を攀ちて上る。全く暮れて空想の絲筋がぼつりと切れて、初めて蒼然と我にかへつて黙々

と下へ降つたやうなことが少くなかつた。

友達があつたが、本を讀んで共鳴の多い友達でなくては親しくならなかつた。要するに小學校はたのしい庭でなかつた。たのしかつたといふやうな記憶があるのは、のちになつて小學生の現實から客觀的になり得て、昔の空想の羽を存分延ばし得たやうな場合の情景を切れ切れに思ひ出の筆さきで潤色するために外ならない。又、小學生を離れて街の少年としては——これはまた甚だたのしかつた。

## 二

中學生は——

小學生よりもさらに惨めであつた。醫學生時代のシラアよりも惨めであつた。この空想的なりし小學生の孵化した中學生は、陰鬱でいつも悲しきうな面持をしつづけてゐる思春期前期の、卑怯で小膽で臆病で非力なる少年であつた。

健康はずでに暗澹としてゐるかつた。何となく弱い、まともでない、蒲柳の質とでもいふのであつたらう。さればとて母に叱られても人並の健康法をせず夥しい本を片端から讀みに讀んで空想ばかりしてゐる少年は、少年らしい快活を喪ひ、勿論機智や世才などの持合せが少しもないから、大人からは好かれない。凡そ大人といふものは、快的でウキッティで祕書官タイプの少年を可愛がるものである。愛嬌などいふものは勿論毛筋ほども

ない。努めて云ひたくない。そそれられても應じない。愛嬌を強ひられると、強ひられたることに早くもつよい反感を感じて、必要以上に無愛嬌な態度を傲然と示す。そこでいよいよ嫌はれる。どうなとしろといふそぶりはつきり示す。わたくしはかくの如き少年であつた。

小學生から中學生にかけて大に勵んだものが二つあつた。學問としては天文學、學課としては作文であつた。その頃の東京の私立中學には廉月給で偉い先生がによぎによぎゐられた。東洋史が好きになつたのは、たださへ歴史好きの性質のわたくしが、佛敎史の專家境野黃洋博士の講義を面白く聽いたためであつた。卓れた日本儒學史家足柄術述先生は倫理を教へてゐられた。この先生の學問的業績について知つたのは大學を出て杳か後のことであつた。英語はエキゾティックの要求のままに努めたが、生來語學に拙であつたに係らず、上條辰藏、片山寛、廣井辰太郎といふやうなエライ先生が多勢ゐられたので、點は勿論わかつたが好きであつた、嫌ひなものは例によつて數學であつた。ある意地悪な先生がわたくしが作文が好きでその方が少しばかり學校内に知られてゐるといふ理由で、そのため反感を持つて事毎にわたくしをいぢめた。それは數學の先生ではなく、かへつて國語漢文の何がし先生であつた。數學の某先生は著書もある偉い先生であつたが、一向興味を持ってないから點はわるかつた。落第點の一寸上に低回顧望してゐた。クラスが變つて外の先生になつたら、その先生は中島先生といふ後明大教授で終られた先生であつたが、個人的にわたくし

を可愛がつて下すつたから、それだけの理由でこの愛憎一念の極度につよい少年は忽ちのうちに數學の優等生になつてしまつた。が、それもその先生についた一年間だけであつた。最も不愉快な素振の先生から落第點をつけられた時には、已にからだの弱い空想的な、勝手に自由のみを欲する、怯懦安逸の少年は激しい神經衰弱に罹つて、四年半ばで中學を休んで、病院通ひを始めなければならなくなつてゐた。

文學は、小學生の頃から鷗外、逍遙、露伴、紅葉以下手あたり次第に讀んでゐた。雑誌は帝國文學、早稻田文學、國文學、新小説、中央公論、太陽、明星、哲學雜誌、丁酉倫理會雜誌等二三十種を毎月缺かさず讀んでゐた。叔父の家にもゐた時で、叔父が帝國文學の編輯委員を辭して間もない頃であつたので、このやうに多く雑誌が來てゐたのであつた。雑誌ばかりでなく文士や學者も多くやつて來て、さういふ人々から成る空氣——赤門文士の空氣といふやうなものなかに生息してゐた頃であつた。

が、最も印象的な記憶はそんな文學上の人物や雑誌ではなかつた。それは落日であつた。餘りに弱いので散歩を始めて、小石川の白山御殿の宅を出て、原町巢鴨大塚などその頃まだ十分武藏野の笹を残してゐた郊外を散策する夕夕に眺め入つた秋の入り春の夕日であつた。

植物園うらの通をゆくと、左に阪谷邸があり衝きあたりが岩村男爵といふ人の屋敷で、それから更にゆくと穴戸伯の別邸があつて、人が棲んでゐず、誰もが庭にはひつてゆかれた。芭蕉の古池の句を誰でも思はずにゐら

れぬやうな小さい古池があつて枯葉が汀に漂つて秋草がうなだれてゐた。この庭の秋の紅葉がよかつた。紅葉の長いトンネルになつてゐて、二三丁もつづいたさきのさがが天國の入口のやうに小さくすばまつて丸く見える。その眞紅な秋の葉の天蓋路をそぞろに歩いてゆくと中ほどに傳記小説にでも出て來さうな明治式の古風な洋館が、人氣もなくひつそりと立つてゐる。わたくしはこの洋館のそばまで行つてそつと中を窺いた。なぜか犯罪的な空氣が感ぜられた。

その後、偶然に讀んだ蘆花生の探偵綺譚のなかに、巢鴨の洋館の犯罪談があつて、その種は明らかに外國物であつたが、それを日本物に引直したのであつて、著者は屹度この巢鴨の穴戸邸をその舞臺にしたにちがひないとわたくしにはおもはれた。

目を据ゑて落日を漁る少年は、夕夕に出ては夕映に涙をながしてかへる小殉情家であつた。間もなくこの感傷少年は、哲學雜誌の刺戟から哲學概論を讀みだした。誰の翻譯概論であつたか記憶にないが、こちたき抽象の論理を辿る難事は、數字の組立てを解き且立てる以上の困難であると染み染み思つた。自分のあたまの非論理性をつく／＼思ひ知つた。心理の分析といふことには、これでもいく分の能力があるやうな勝手な自信が己にあつたが、哲學には參つてしまつた。こんな理解をわけなく行ふ哲學者とは神の如きあたまの人にちがひないと大に畏敬の情を生じた。そこで、わけもなく哲學を棄ててしまつたが、その頃華嚴の瀧に投じて死んだ一高生藤

村操が上級生で、そのクラスの者から藤村の戀愛や言動をきいてゐたので、彼に關聯して一般世間の精神問題となつた、涙香の天人論風の素人哲學や、梁川の見神の實驗の問題などにあたまを衝込み、現實では次第に高まる思春期的苦惱に身をもてあつかひかね、兼て昔からのこれのみが特色である空想の過剰の宿命的重荷に、わが身わが心を疲らせてゐる折も折、肥厚性鼻炎からの神經衰弱がひどくなつて、耳鼻科と神經科とへ通ひ出して、英譯の赤い表革表紙の廿四卷本ツルゲエネフを唯一の愛讀書とあがめ、朝に夕に行任坐臥手許から片時も離たず、それを讀み讀みその手のくんだ、そつのない、しかも靜觀的な現實描寫の間に、飄々と仄めきただよふ情趣のじつとりと深い、落葉を踏むやうな感じのあのスタイルに惚惚として、讀み且考へ、考へ且譯すといふ療病的二年間を、さながら夢の間におくつてしまつた。

### 三

中學は小學より尙いやであつたが、大學は中學より更に一層いややであつた。

ほとほと親友らしいものを持ち合せずにすごしてしまつた。陰鬱は一入色濃くなり、空想にはもえ上る情慾があくどく混じ、健康はさらに一層損じて、時として處々で卒倒した。記憶がさらに減じ、推理が全く不可能となり、樂慾が存在の全部を占めて、いく分かでも持ち合せたと信じてゐた



感受性の意識が、意識して心の表面に上らずに、それが鬱屈した歪力のやうに、行動的にそそのかしゆすぶつて駄まなかつた。空想のあくどい變貌がメルヒエン性の人生をその頃さかりの灰色の自然派的人生にかへしめなければ、そして手をのばして讀みうる限りの自然派小説を讀んだけれども、その世界觀にも藝術觀にも不満で賛成は頓と出來かねた。無條件で禮讚する若荷畑の文學諸生等に、事々に反感を有たされた。友人というても、一緒に飲食やとりとめもない江湖談をかはすゆきずりの友人ばかりであつた。全く黒々と塗りつぶした人生の鐵壁に向つて立たされてゐる寺子屋のチョマになつてしまつた。感激するやうなことを云ふことはあつても、その誇張を意識して、その誇張的感激の放大されたるなかに故ざと身を置いて、辛くも自分のありどころを悦ぶといふ、卑怯無知なしぐさをとつて恥としなかつた。

勿論講義には出なかつた。島村抱月先生目指して入學した私立大學であつた。何も就職のむづかしい設備の悪い私大に故さら入るにも及ばぬ、ぢやないかと叔父はいうた。良家の子女は、帝大生、一高生といふと日本青年の理想の典型のやうに考へ、私大生などいふものはまともな諸生とも考へなかつた頃であつた。が、わたくしは病院通ひで中學上級時代が足踏みしたから、今更上級をやり直して友人のあとを追うて高校に入るやうな迂遠な方法をとるのは已にいやになつてゐた。それ許りでない、宛ら天下を瞰望すると、當時東大には何がしといふ英國人の老爺がゐるて退屈な語學の復

\*

一隨筆

習をしてゐた。外には日本人教師はない。あつても上田敏と漱石後には人材が途絶えてゐる。しかるに京都には上田敏がゐた。早大には抱月がゐた。今日たしかに文學を鑑賞味解して、それを論理化して講義に托しうるものは、この二人を措いて外にはない。同じことなら土地柄京都へ赴きたい。が、中學のやり直しは耐へうる處でないから、まづ早大で我慢しようか。さう考へて、中學三年得業のわたくしは、入學試験をうけて早大に入つた。私立中學は縣立中學より野趣滿々玉石同架で大におもしろかつた。秀才面して月並な虛榮心を満足させて一高に入つてもしかたなからう。加之、一高生數人とは中學三年の頃、梅月といふ一高前の菓子屋の貸部屋で菓子を喰ひ乍ら短歌會を開いて作歌の腕前は知つてゐる。歌づくりに關する限り、自分の前にあらはれた數人の一高生は、中學三年の自分よりは香かに下等であつた。常識的にそぶりする秀才型青年らにすぎなかつた。豫て翹首してゐた一高生とはこんなものであつたかフンと、この小生意氣な臆病な驕兒は心中で嗤つた。一高生の幻影が大方うすれてしまつてゐる折でもあつたので、早大豫科に一種の望みを繋<sup>か</sup>けて入學したのであつた。さて、入つてみるとおどろいた。さりとて非道い低調と貧弱と無意力の五味棄場である。學生は高校の落第生みたやうな者計りで、自分のやうにウブな思ひで入つて來たものはほとほと見られない。不潔な性生活で情操を汚し切つてゐる、顔色のわるい、意力のない、育ちのひくさうな、神田神保町邊にいつもウヂヤウヂヤしてゐる、あのタイプの小汚ない學生が大

部分である。少数の文學諸生らしい型の者があつて、それは又ぐつとハイカラで道樂者で夫の官大など齒牙にもかけない才人タイプがゐたが、それはクラスに僅か四五人を出なかつた。後年、自分が卒業した大正三年といふ年の卒業生を、名録によつて詳さに東早兩大純文科について比較してみると、自分が感じたやうな著しい見劣りを早大に見出しえなかつた。卓れた創作家や翻譯家や學者が、いくらもあの低調無意力で薄汚ない、西洋貴族の馬小屋のやうな學舎の中から輩出してゐる。東大出には大學や高校の教師が大部分で、早大出とは種類がちがふが、それを文化人材觀の目安で因襲を離れて比量してみると、當年山の手の紳士の家庭の生意氣な女中や小間づかひにまで、正常の學生扱ひをせられなかつた私大生が、拮抗して獨力個性を發揮してゐたことを、傳記的事實の擧證に於て見出し得た。かう書いてもわたくしは、當時の私大經營當局者などを讚美する氣持では毫頭ない。少數の刻苦して自ら成して挺身して低調卑野の空氣の中で辛くも自己を完成させようとした昔の私大諸生らの浪漫的意氣を少し許り尊ぶのみである。

唯一の憧憬の的だつた抱月先生は四十過ぎて悲慘で同情に耐へぬ女優松井須磨子との戀愛のあだかもさなかであつた。學生は、その純率な氣持で凡て抱月黨であつた。が、坪内先生に反感は少しも有たなかつた。對立を感じたのは、學校と抱月先生の奥さんであつた。それ位に事の内情に吾等は略ぼ通じてゐた。後に生彩ある小説の筆で天下の子女をうならした某

君は、先生の神經的あくびを見のがさなかつた。襦袢の襟垢を見のがさなかつた。袖のほころびのままをば見のがさなかつた。そしてクラスに逐一報告した。抱月先生の學殖と才思に嫉妬を感じる教員の某々は、時來れりとして先生を弾劾した、排斥した。中でもつとも惡質陰險な某は、黒板に自然派の實行家島村云々と大書して學生の賤しい笑ひを求めようとしたが、ただかへつてその侮蔑を買つたばかりであつた。學識の自信のない大學教員が、いつの時代にもポリシイを用ゐて優秀な同僚を陥れる。そして何大商事會社理事といふ商人等の無知な歡心を買つて小作りな榮達を圖る。

學校にこそ失望し、大部分のクラスメイトとこそ遠かつたけれど、少數の友人は遠がにあつた。今日文士翻譯家として大に名をなしてゐる諸君子の外に、そこには後年全く社會から影を没してしまつた二三の友人がゐて、わたくしの親しみは文場の手取りとなつた才人等よりも、心の睦みは寧ろその裏町の人々の上にあつた。頭もよかつた、徳もあつた。それにも拘らず彼等はそのあとを韜晦して社會から全く姿をくらし、一平凡商人や教員として生きるか、若死をしてしまつた。ある者はつひに狂死した。

わたくしの大學時代は、八釜しい英作文の先生にはとつちめられ、下手な會話では擲揅せられ、退屈な切賣講義であたまを濛々潰々とさせられて、いつも氣が重く災殃が待つてゐるやうな氣がして陰鬱であつた。圖書館から西鶴の原本をその頃は易々借り出せたので、それを片端から讀んで